



先生の創意の尊重

——カリキュラムの問題にも觸れて——

倉 橋 惣 三

創意は、生命のいきいきしているあらわれである。従つて創意を養うことは、生命をいきいきさせることである。新しい教育が、子どもの創意を貴ぶのは、新教育が生命の教育だからである。創意は單に知の活動に屬しない。潑刺たる感情活潑な意志から生れる。幼い子供らは、必ずしも知的にすぐれてはいない。しかし、動いて止まない新鮮な情意に充ちている。そこから溢れずにいないものがある。ほとぼしらすにいないものがある。その溢るゝところ、ほとぼしらすところ、創意の歌となり、創意の繪となり創意の動作となる。創意はたゞ他と異つていふことだけではない、型を破つていふことだけではない、他を摸していふべく餘りにいき／＼してゐるのである。型に従つていふべく餘りにいき／＼してゐるので

ある。そうして、そこにのみ生命の喜びが得られるのである。生命は自己の生命である。すなわち、自己自身の満足が味わられるのである。見よ、幼児が創意の生活を楽しんでいる時の幸福さを。その反對に、全く創意の生活のない、或は創意の少ない魯鈍の子の自ら樂しむことの少なき不幸さを。それも、持ちまへの生命力が乏しいならば、かわいそうながら仕方ないとして、誤つた教授と習熟の名の下に、模倣を強いられ、型を課せられて、折角の獨創の機會を閉ざされ、獨創の流露を妨げられ、生命の喜びと、眞の自己の満足を奪われている子らの不幸を。——しかし、こゝでは、そのことを、更めて悲しもうとしてゐるのではない。考えたいのは、誰れが幼児らを、そんな不幸にあわせるかということである。

特に誰れかと問う。何がと問うたら、幼児數の多いことがとか、設備の不充分なことがという言いわけが出るかも知れない。われらの究めたいのは、そんな外部の條件ではない。又、そういう保育法を習つて來たからとか、皆がそうしているからとかいう答辯も出るかも知れない。われらの省みたいのは、そんな人ごとのような押しつけではない、或は又、まだ新教育法をよく讀んでおりませんからという、あどけない辯解が出るかもしれない。われらの責めたいのは、そんな知識の不足ではない。問題は簡單である。何がなんであろうとも事情や理由がどうであらうとも、平氣で幼児にそんな不幸を與えることができる人は、どういふ人かということである。——つい言葉がきつ過ぎたら許して下さい。

答は更に簡單である。その人は自分で創意の力のない人である。創意による生命の喜びと、眞の自己の満足の経験のない人である。自ら味わいを知らぬ人は、人に味わせたかも知れないだろうし、人の味いを妨げても平氣である。その平氣は、外部の事情の關係でもなく、教育法の流儀によつてもない。その人である。自ら創意性のない先生その人である。前に、何がといわず誰れかと問うたのも、この簡單な、しかし一番大切な問題の底に、ぶつかりたいためであつた。

三

幼児に創意力養成の必要は、前からも言われなかつたことではない。殊に、所謂新教育において、それが強調される。

というよりも、我國の教育のその點の缺陷が、大に指摘されている。早い話が、集團の方法を排斥するのも、個々の幼児の創意に出場を失わせることを恐れるからである。それを、個の尊重というのは、教育哲學的な用語で、教育心理的には創意の獨自性の重視である。劃一を強制しないとき自由を與えるというが、自由のために自由を尊重するのでもない。第一、幼児の自由なんか、大して人格的實質價值のある譯のものでもあるまい。してみれば、幼児における自由の價值は、生活の形式價值であるといつてもいゝものかも知れない。つまり、幼児に容易に創意の活動をなし得させるに都合のいい生活の形式なのである。つまり、個の尊重といふ、自由の尊重という、新教育のモットウも、幼児の創意を貴び、創意の力を養成したために他ならぬこと、言つてもいゝのである。

そこで、創意の尊重が先決の要件である。幼児の創意を尊重するためには、先づ先生が創意の人でなければならぬ。自ら創意の生活に生きる人でなければならぬ。自ら創意の生活を樂しむ先生は、幼児にも創意の生活を樂しませたいだろうし、樂しませずにいられないだろうし、少くも、それを抑え禁ずことにたえ得られないに相違ない。

幼児の創意を貴ぶ教育は、先づ、先生の創意を貴ばなければならぬ。

四

先生に創意の鈍ぶるには、種々の原因と理由がある。これによると、閑な先生が却つて無創意に居眠つていたり、ためともいうが、閑な先生が却つて無創意に居眠つていたりする。性格本来の創意貧困とか、生活疲勞のための創意衰弱とあつては、如何ともしかたがないが、苟も先生として、その任にある人に、そんなことがある筈はない。とすれば先生の倦慢か。そんなこともある筈がないとすれば、教育という仕事による習性か。創意なしの學問や藝術は一日もあり得ぬ。それは研究發見と刻苦創作の連続である。それに比して、後から來るものに、同じことを授けるだけでも日の送れる(?)教育という業(?)の墮性性と安易性(?)とによる習性か。それは先生にはついそうならないとも限らないことゝしても、苟も愛する幼児らのために、そんな投げやりでいられることではあるまい。そこで、こういろいろ考えて來てみて、たゞ一つの理由、教育の仕上げ主義——出來上りの結果のみばえを求めること——のために、幼児の創意による自然の過程——恐らくまわりくどい途をとるでもあろう——に従えないためと、その結果、それ(創意による過程)を平氣で無視する教え込み技巧にあるとしなければなるまい。

この、教育の仕上げ主義、殊にみばえの出來上りを急ぐ教育方法位、眞の教育の忌み斥けることはない。又、そういう心もち程、新らしい教師に戒めたいものはない。

五

仕上げ主義は、幼児の創意過程を無視するばかりでなく、先生自身の創意過程をも無視し勝ちになる。先生をも、自分の工夫より人の工夫にたよらせ、新しい方法より既成の方法に従つた方が大丈夫だと思わせたりする。そのために、自分で考案する責任も自負も放抛して、模範とか準據とかいわれるものをもとめて、それにすることが安心させたりする。そんな場合は澤山あるが、手近な例の一つがカリキュラムにある。

カリキュラムは教育になくはならぬものである。しかしそれは先生をつくるべきものである。人のカリキュラムの借用とか、況んや天下共用のカリキュラムとかいふものはあり得ない。一體新教育において、カリキュラムに就て尊重することは、カリキュラムの必要そのことよりも(そんなことは今更のことではない)カリキュラム・メーカー即ち、先生が自分でカリキュラムをつくること、つくる力をもつことである。一齊カリキュラム命令、カリキュラム、天下りカリキュラム、機械的に盲従することをやめて先生が自分達のカリキュラムによつて、自分達の教育を行うようにすることである。これを言い換えれば、先生が、それらの教育環境と教育條件に基いた創意の教育を實行するためである。それがどうであらう。どこかに、いゝカリキュラムはないかと、他人のつくつたカリキュラムを探している風はないか。又、それを迎えて、カリキュラムの配給のような仕事さ先行われている風はないか。おかしいことゝいうよりも、なさないこと

とである。そして、これ皆、先生に創意の尊重も實力もない
悲哀乃至寂寞といわなければなるまい。ひきうつしカリキ
ラムなんていうものは、世にもカリキラム・メイキングの
反對である。

六

勿論、創意は徒らに異をもとめ、奇を立てることではな
い。人のつくつたカリキラムでも、採つて用ゆべきは許し
を得て借りていゝであらう。自ら考えるために、人の教えを
參考させて貰うのもよいことであらう。創意々々といつて、
何も我流を通す偏狹をほめるのではないし、況して、一寸し
た思いつき（創意と似て最も非なるもの）を、我が流儀と
名乗つて主張するのを、えらしとするものではない。自分で
考えていゝと思ひ定めたら、どし／＼學ぶのもよいであら
う。しかし、カリキラムというものが、そう／＼よそのを
そつくり適用したり、採用したりできるものではない。そん
なものなら、どこかに一つ標準カリキラムがあつたら、こ
ゝもそこも借リキラムで間にあつて先生はいらぬようなも
のである。折角の新教育が、先生の創意を重んじて、カリキ
ラム・メイキングを、教師必須の實力として強調したのに
こんな、とんでもない逆な現象が起つたのでは、カリキ
ラムは泣くであらう。

七

カリキラムといつた大きい創案でなく、一つの繪、小ま
な製作でも、いつも型にはまつた同じことを繰り返かえして
る先生は、幼兒をも單調無變化の、心のはたらきの鈍い子に
して仕舞う。そうして、生活に自分を樂しむことを知らない
ものにして仕舞う。彼等はそういう教育に倦き／＼させられ
るといふ以上に、倦き／＼するという感覺をも失わされる。
生命の沈滞である。

氣のいき／＼している先生は、固定定住にたえない。部屋
の裝飾にしても、調度の配置にしても、不斷の工夫によつて
次々の變化が加えられ、そこで行われる生活を清新ならしめ
ずしておかない。どんないゝ教材でも十年一日の如き陳腐で
は、教えるもの學ぶもの共に、感興の新鮮をもちたらし得ない
が、一寸した排列のかえ方、取扱いのちがえ方で、新味を添
えずにいらない。況して、湧くが如き創意によつて、日に日に
新たな教育を行つてゆく先生は、その教育そのものが新しい
のみでなく、自分と子供らとを、常に新しい生活者にせず
いない。發達は變化であり、變化は新生である。眞の發達現
象である教育は、新生の連續に他ならぬ。新生は新しい自分
を生むことであり、それをもつと端的にいえば自分を新しい
ものに生れかわらせることであり、教育的新生の眞の意義は
それに他ならぬ。自己を新しく生み得ない先生は、子供にも
自分を新しいものに生む力を促し得ない。子供らに、たえず
新しい自分を生む力を養い得ない教育は、生命の涸渇した
教育である。